

# 母親になること：子どもを持つ女性と 女子学生の自己意識の比較

井上 芳世子  
(2002年9月30日受理)

Motherhood: differences in the sense of self between women having children and female students

Kayoko Inoue

The present study examined how the mother culture would affect the sense of self in women having children. Four-hundred fourteen mothers and 212 female students. A questionnaire consisted of five scales: (a) Internal Working Model Scale (Takuma & Toda, 1988), (b) Self-esteem Scale (Yamamoto & Matsui & Yamanari, 1982), (c) Achievement Motivation Scale (Horino, 1987), (d) Maternal Scale (Hanazawa, 1981), (e) Satisfaction Scale (Aoki, Matsui & Iwao, 1986; Ono, 1984). The following results were obtained. First, mothers differ from female student in terms of the sense of self-quantities. Second, mothers live on larger relationships with others than female students.

Key words: mother, female student, mother culture, sense of self, relationship  
キーワード：母親，女子学生，母親文化，自己意識，関係性

昨今、子育てが女性にとって難しいといわれている。これは、女性は子どもを産めば「母親になる」という、これまでは当たり前と考えられてきたプロセスへ再吟味を投げかけるものである。はたして女性は、子どもを持てば、母親らしい「母親になる」ことができるのであろうか。

## これまでの母親研究

従来、母親研究はいくつかの理論で説明されてきた。大日向(1988)は、「母性」の研究から女性がどのように母親になっていくかを明らかにしている。従来、母親は子どもと適切な関係性を築けると見なされ、それは女性に本能的に備わっている母性本能が開花するためであるとされてきた。しかし、大日向(1988)は、子どもに対する愛着と夫に対する愛着が異なることから、子どもとの間に適切な関係性を築くには、夫との関係性も影響していることを明らかにしている。すなわち、母親になるとは、女性に本能的に備わっているとされてきた母性が開花することではなく、子どもや

夫と適切な関係を築いていく中で育児能力が発達していくものであると述べている。

柏木・若松(1994)は、子どもを持ち親になることによって、どのような人格的・社会的な行動や態度の変化が生じたかを研究している。その結果、育児への参加の程度や育児を肯定的にとらえるかどうかといったことが、“柔軟さ”や“自己抑制”など親としての人間的な成長につながることを明らかにしている。育児を通し、育児に従事していく中で、母親として発達していくというのだ。

他方岡本(1996)は、Ericson(1950)のアイデンティティ理論をベースに、育児期の女性のアイデンティティ様態と家族関係との関連性について調査している。岡本(1996)によるとアイデンティティ論は、個の確立によって発達していく側面と同時に、他者との関係性によって成熟していく側面がある。特に育児期の女性にとっての母親としてのあり方は、成人女性として持つ複数のアイデンティティの中でも特に重要なものである。岡本(1996)は、この母親としてのアイデンティティと個としてのアイデンティティの統合・

葛藤に家族関係がどのように影響しているのかを示した。その結果、夫や家族に対する肯定的な関係性の捉え方が、個としてのアイデンティティばかりでなく母親としてのアイデンティティの統合を支えることをみいだした。

このように、これまでの研究では、心理学の様々な理論をベースに、子ども、夫・家族との関係の中から、「母親」になることで生じる変化を説明してきた。つまり、子どもを持ち母親になることで、なんらかの心理的側面が変容し続け、母親になっていくのだ。

## 文化心理学的な観点

その一方で、近年の心理学研究の理論や方法を考えるにあたって、新たな指摘がなされている。北山(1997)は、文化心理学の立場から、そこに存在する文化的な背景を考慮していくことの大切さを再認識している。これまでの研究では、人の心は普遍的であるという立場に立ち、心理学的に測定された態度や行動の個人差は、文化の差であるとしか考察がされてこなかった。しかし、北山は人の心というもの文化や民族によって異なる可能性があるとして述べている。つまり、心は文化に関与することで形成され、同時に文化は心によって維持・変容されながら受け継がれていくというのである。

北山(1997)によると、文化と心とは、相互に取り込みあい、いわばお互いがチューニングしあい、相互に維持し、ある一定の均衡を保ちつつ、同時に、恒常的に矛盾、コンフリクトを内包し、このようにしてともに変容していくと述べている。その際、関係性の変化により、関係性に伴う情緒的感情も変化する。つまり、従来の研究のように愛着や関係性の構築だけを問題にするのではなく、その関係性の変化によって心そのものの構造が変化する可能性があるのである。

文化心理学的な観点から母親というものについて考えてみると、女性は子どもを持つことで、ある種特別な社会的役割につくことになるといえる。この新たな役割につくことで、生活習慣は大きく変わる。例えば、会話のスク립トや興味・関心の対象、さらには生活様式だけでなくさまざまな儀礼に及ぶまで変化する。これは単なる変化ではなく、これまでとは全く異なる価値体系を持つ世界に身を置くようになるといえるのではないだろうか。すなわち、これまでとは異なる、新たな文化である母親文化の一員になると捉えることが可能なのではなからうか。

## 本研究の目的

母親になる以前とは異なる価値体系を持つ、母親文

化の中で生きることになるというのは、単に関係性の変化に対応するというよりは、複雑な要素を持つ個人内の心の構造も、これまでとは異なったものに変容させると予測できる。そこで本研究では、母親になることを、個人レベルではなく文化レベルで考えることにし、母親文化に入ることによって、母親達の心の構造にどのような違いが生じるのかを明らかにしたいと考えた。そのために、意味体系の捉え直しの結果生じる心の構造の変化を、母親と母親予備軍である女子学生とで比較考察し、「母親になる」ことでどのような自己意識の変容を遂げているのかについて明らかにすることを目的とした。

## 方法

### 対象

O市内の4年生大学の女子学生212人(平均年齢:19.5歳,レンジ:18-25歳)と3~5歳の幼児を持つ母親414人(平均年齢:34.3歳,レンジ:23-46歳,子どもの平均数:2.21人(SD:.71,レンジ:1-5),74.4%が専業主婦)。

### 手続き

質問紙は、2000年10月下旬と11月上旬に授業や幼稚園、母子サークルを通じてアンケートを配布した。記入後は、封筒に入れ封をした状態で回収した(回収率は73.7%)。

### 調査内容

北山(1997)の心の構造を参考に、質問紙を作成した。質問紙は以下の5尺度からなり、合計61項目で構成した。

- (1) 愛着スタイルを測定する尺度として、詫間・戸田(1988)の内的ワーキングモデルを測定する尺度を用いた。その中から、因子負荷量が高く、表現・内容がわかりやすい9項目を採用した。
- (2) 自己評価のプロセスを測定する尺度として、山本・松井・山成(1982)の自尊感情を測定する尺度を用いた。その中から、因子負荷量が高く、表現・内容がわかりやすい5項目を採用した。
- (3) やる気の構造を測定する尺度として、堀野(1987)の達成動機を測定する尺度を用いた。その中から、因子負荷量が高く、学生・母親の両者に使用できる5項目を採用した。
- (4) 意志決定の方略の一つとして、母親文化に適応していく上で必要だと思われる母性意識で捉え、測定する尺度として、花沢(1981)を用いた。その中から、表現・内容がわかりやすく、学生・母親の両者

に使用できる9項目を採用した。

- (5) 感情のシステムとして、生活への充実感を測定する尺度を作成した。青木・松井・岩男(1986)や大野(1984)を参考に、学生・母親の両者に使用できるような内容である33項目を採用した。なお、(1)~(5)は6段階評定であった。

## 結果と考察

### 1. 因子構造・信頼性の検討

「心の構造」の全回答データに基づいて、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。そこで、

共通性の低いものや他の因子へも負荷のある項目、解釈の困難な項目を除去した<sup>1)</sup>。その結果、固有値1以上を基準として6因子が抽出され、全分散の61.1%が説明できることがわかった (Table 1)。

第一因子は、生活の中に打ち込めることがあることや、何かを成し遂げる喜びを感じていること、生きがいを持っていてといった内容であった。これは、現在の生活に対して充実していると感じている因子であると考えられる。よって、「充実感」と命名した。

第二因子は、誰からも相手にされていないと感じたり、取り残されているという感じがすることや、人から疎まれているといった思いがある内容であった。よっ

Table 1. 心の構造項目の因子負荷量行列

	F 1	F2	F3	F4	F5	F6	$\alpha$
生活の中に打ち込めることがある	0.95	0.13	-0.03	0.00	-0.08	-0.08	
何かを成し遂げる喜びがある	0.92	0.09	0.03	0.02	-0.07	-0.07	
生きがいのある生活をしている	0.88	-0.06	-0.01	-0.06	0.03	-0.06	
はりのある生活を送っている	0.83	0.01	0.03	-0.06	0.01	-0.01	
生きる喜びや実感を味わっている	0.79	-0.00	0.03	-0.02	0.11	-0.02	.93
自分らしい生活ができています	0.70	-0.05	-0.08	-0.07	-0.04	0.06	
信念にもとづいて生きている	0.60	-0.01	-0.01	0.13	-0.02	0.13	
価値のある生活をしている	0.56	-0.12	0.03	-0.02	0.13	0.10	
生きていく上での目標がある	0.52	0.01	0.00	0.20	0.01	0.11	
誰も私を相手にしてくれない	0.04	0.95	-0.01	-0.06	0.06	0.13	
いやいやながら親しくしてくれている	0.15	0.77	0.04	-0.03	-0.03	-0.05	
取り残されているよう	-0.14	0.75	0.05	0.03	0.07	0.09	
わかってくれる人がいない	-0.02	0.72	-0.06	-0.04	0.01	0.08	.87
自分が情けなくいや	0.04	0.63	-0.03	0.11	-0.04	-0.29	
何もする気がしない	-0.29	0.41	-0.05	0.06	-0.11	0.01	
生き方に確信を持っていない	-0.30	0.36	0.06	-0.07	0.08	-0.12	
知り合いができやすい	0.03	0.02	0.93	0.00	-0.03	-0.02	
すぐに人と親しくなる	0.00	-0.01	0.93	-0.05	0.01	-0.05	.90
初めて会った人とでもうまくやっていける	-0.06	-0.00	0.76	0.06	-0.01	0.10	
自分を深めたい	-0.05	0.03	-0.01	0.85	-0.03	0.01	
自分なりに努力してやってみよう	0.10	0.05	0.02	0.71	-0.01	0.07	.81
一生懸命やってみたい	-0.04	-0.10	0.00	0.69	0.04	-0.16	
目標を持っていたい	0.02	-0.01	0.01	0.61	0.04	0.05	
妊娠はすばらしい出来事	-0.04	-0.00	-0.01	0.00	0.91	0.00	
赤ちゃんを生むことは女の特権	0.00	0.09	-0.02	-0.03	0.81	-0.03	.81
子どもを育てることは自分自身の成長	0.02	-0.04	0.01	0.11	0.61	-0.02	
自分に自信がある	0.01	0.02	0.01	0.04	-0.01	0.82	.77
自分に満足している	0.08	0.03	0.01	-0.07	-0.03	0.74	
寄与率	31.63	7.59	8.56	6.22	4.59	2.50	
累積寄与率		39.22	47.77	54.00	58.58	61.08	

て、「孤立感」と命名した。

第三因子は、知り合いが得意なことや、人と親しくなりやすいこと、初対面の人とでもうまくやっていけることといった内容であった。よって、「人へのなじみやすさ」と命名した。

第四因子は、いろいろ学んで自分を深めたいという欲求や物事に対して自分なりに努力して、一生懸命やりたいという内容であった。よって、「自己向上」と命名した。

第五因子は、妊娠や出産、育児といったものへの肯定的なイメージを表す内容であった。よって、「母親役割の受容」と命名した。

第六因子は、自分に自信があるといったことや、自分自身に満足しているという内容であった。よって、「自己への満足感」と命名した。

各因子について、信頼性の検討のためにクロンバツクの $\alpha$ 係数を算出した結果、各因子は $\alpha = .93-.77$ でほぼ満足することから、これらの項目を採用した。

以上のことから、北山(1997)に基づいて考えた心の因子構造には、「充実感」「孤立感」「人へのなじみやすさ」「自己向上」「母親役割の受容」「自己への満足感」の6因子の存在が確認されたといえるだろう。

## 2. 心の構造を構成する因子の比較

母親になることで生じる心の変化を検討するため、因子分析で得られた6つの心の構造因子を、女子学生と母親で比較することにした。そこで女子学生212人と母親414人について、心の構造の各因子について平均構造を考慮した確認的因子分析を行った。その結果、適合度統計量は、 $\chi^2=559.7$  ( $df=246$ ,  $p=0.00$ ), RMSEA = 0.045 であり、モデルへのデータのフィットは悪くないと言える。よって、この結果からも心の構造には、

女子学生、母親とも、「充実感」、「孤立感」、「人へのなじみやすさ」、「自己向上」、「母親役割の受容」、「自己への満足感」が存在することがいえる。

次に、女子学生群と母親群の各因子の平均を比較するため、母親の各因子の平均を0、分散を1とおいて、因子分析を行った (Table 2)。その結果、母親群に対して、女子学生群は「孤立感」において C.R. (標準正規分布に従った検定統計量) = 7.45 ( $p < 0.001$ )、「自己向上」において C.R. = 4.23 ( $p < 0.001$ ) と有意に因子得点が高く、「母親役割の受容」において C.R. = -3.86 ( $p < 0.001$ ) と有意に低いことが明らかになった。つまり、母親群は、「孤立感」「自己向上」が有意に女子学生群よりも低く、「母親役割の受容」が有意に高いことがわかった。この結果から、学生群は相手にされていない、嫌われているといった他者から孤立していると感じる傾向、より自分を高めたいという自己向上を感じる傾向が、母親群に対して高いことがわかった。他方、母親群は、出産や育児といった母親役割を肯定的に受容する傾向が学生群よりも高かった。母親役割の受容については、母親が実際に現在育児を行っており、母親役割を受け入れていることから考えると、育児という経験が母親役割の受容を促進している側面があることを伺わせる。母親になること、育児をすることの背景には、自分を必要としてくれる子どもや、精神的に支えてくれる夫の存在がある。母親群の孤立感の低さは、母親になることを通して、誰かに必要とされたり、必要としたりするような、相互に支えあう他者の存在が背景にあることが伺える。これに比して、誰かに必要とされる側面が母親よりも乏しい女子学生は、他者から孤立していると感じる傾向が高いことは推測できよう。

また、女子学生の自己向上の高さは、女子学生がまだ発達段階的に過渡期であることが考えられる。女子学生は、母親のように他者との関係性の中で生きているというよりも、まだ自己や個人の発達・成長に重きを置く時期であると言える。その結果、個人の能力を高める自己向上の意識が高くなると考えられるだろう。

しかしこれらの結果だけでは、あくまで母親群と学生群の心の各要素にどのくらいの量的な変化があったのかを検討したにすぎない。そこで、学生群と母親群で、心の各要素にどのような因果関係の違いが見られるのかについて検討する。

## 3. 心の構造を構成する因子の結びつきについて

母親群、女子学生群で、心の構造の因子間の関係を見るため、各因子間の相関を比較した (Table 3)。その結果、女子学生群は母親群に比べて、「充実感」と

Table 2. 心の構造の各因子得点

	母親		女子学生		有意水準
	平均	分散	平均	分散	
充実感	0	1	-0.12	1.16	
孤立感	0	1	0.87	1.65	**
人への なじみやすさ	0	1	0.04	1.46	
自己向上	0	1	0.39	0.85	**
母親役割の 受容	0	1	-0.40	1.42	**
自己への 満足感	0	1	-0.18	1.29	

\*\* $P < .01$

Table 3. 心の構造の各因子間相関（母親）

	充実感	孤立感	人への なじみやすさ	自己向上	母親役割の 受容	自己への 満足感
充実感	1					
孤立感	-0.45	1				
人への なじみやすさ	0.34	-0.27	1			
自己向上	0.28	-0.08	†0.18	1		
母親役割の 受容	†0.32	-0.14	**0.13	0.44	1	
自己への 満足感	0.52	*-0.33	†0.36	0.24	0.08	1

Table 4. 心の構造の各因子間相関（女子学生）

	充実感	孤立感	人への なじみやすさ	自己向上	母親役割の 受容	自己への 満足感
充実感	1					
孤立感	-0.36	1				
人への なじみやすさ	0.35	-0.24	1			
自己向上	0.27	-0.17	†0.29	1		
母親役割の 受容	†0.21	-0.16	**0.35	0.46	1	
自己への 満足感	0.57	*-0.47	†0.19	0.14	0.03	1

\*\* $P < 0.001$  \* $P < 0.05$  †有意傾向

「母親役割の受容」との間の相関が低いことがわかった。さらに、「人へのなじみやすさ」と「母親役割の受容」の間に、母親群よりも有意に高い相関（両側1%検定で有意）があった。これに対し、母親群は、女子学生群に比較して、「充実感」と「母親役割の受容」との間に相関があった。

この結果から、「母親役割の受容」に関し、母親群と現在母親ではない女子学生群では、生活の「充実感」と「母親役割の受容」と「人へのなじみやすさ」との関連に違いがあることがわかる。このことから、母親役割の受容に関する心の要素が異なることが示されたと言えるだろう。母親の実際の生活スタイルを考えると、充実感と母親役割の受容が関係していることは理解できる。

他方、女子学生は、人に対してなじみやすいかどうか、母親役割の受け入れに関連があることについては、次のように考えることができる。母親になること

は、新たな対人関係を築いていくことでもあると考えられる。とすると、人に対してなじみやすいと言うことは、他者とよい関係性を作れる素地があることであり、そのことが将来的に、母親役割の受容と関連しているかもしれないと考えられる。

また、女子学生では「孤立感」と「自己への満足感」の間に、母親群よりも有意に高い相関（両側5%検定で有意）があった。これに対し、母親群は「人へのなじみやすさ」と「自己への満足感」の間に相関がある。さらに、「人へのなじみやすさ」は「自己向上」とは相関が低いといえる。このことは、女子学生群では「自己への満足感」が「孤立感」と関連しているのに、母親群は、「孤立感」ではなく、「人とのなじみやすさ」が関わっているといえる。このように、学生と母親では、自己に対して満足感を与える要因が異なることが伺える。母親において、女子学生のように、他者からの孤立感が自己への満足とあまり関係がないのは、母

親という存在が、すでに子どもや夫と親密な関係性を築いており、根本的に孤立感を感じにくい状況にあるためであると考えられる。母親において、自己への満足感が、なじみやすさと関係があることは、親密な関係性を作れることが自己に対する満足度をうむのではなく、むしろ、周囲の人たちになじみ、うまく関係を作れるかということが関わっていることを予測させる。女性のアイデンティティを考える上で、男性とは異なる点が、他者と関係性を維持していくことであるとされている(岡本, 1996)。本研究の結果は、女子学生には、親密な関係性を築けるような他者を求める姿、母親には、子どもや夫などの親密な関係性を基盤に、周囲の人たちとよい関係性を築こうとする姿を示しているように思われる。このように、母親、女子学生両者とも、女性にとって、他者との関係性というのは、心理状態や満足感に大きく影響することが推測できる。

### まとめ

本研究の結果から、女性は子どもを持ち、母親文化に入ることによって、心理的な側面が変化してくることが予測できた。特に、母親予備軍である女子学生と比較した結果、母親はより大きな関係性の枠の中で生き、そのことが自己への満足感や充実感に影響していることが示された。これは、母親には自分を必要としてくれる子どもや夫の存在があるためであろう。しかし、本研究では、母親文化に入ることによる心の変容プロセスを説明することはできなかった。これは、比較対照として用いた女子学生には子どもや夫に相当するような関係性を築いている他者の存在がないため、直接比較検討することができなかったためである。今後、このような視点を視野に入れ、母親文化に存在する変容プロセスの全体像を明らかにしていきたい。

**付記** 本研究は、2000年に岡山大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。本論を作成するにあたり、広島大学湯澤正通助教授、岡山大学青木多寿子助教授にご指導いただきました。謹んで御礼申し上げます。

また、アンケート実施にあたり、岡山大学付属幼稚園、岡山市立芥子山幼稚園、和気町立本荘幼稚園、和気町立和気幼稚園、ならびに岡山市母子サークル「いずみの会」の多数のお母様方にご協力いただきました。

また岡山大学教育学部の女子学生の皆様、就実女子大学の学生の皆様にもご協力いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

なお、本研究の一部は、日本発達心理学会第13回大会で発表した。

### 【注】

1) 33項目を除外した。

### 【引用文献】

- 青木まり・松井豊・岩男寿美子 1986 母性意識から見た母親の特徴 —ライフ・ステージ, 自己評価, 充実感との関係から— 心理学研究, 57, 207-213.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton. 仁科弥生(訳)1977, 1980 幼児期と社会1・2 みすず書房
- 花沢成一 1981 母性意識と母性感情の日伯比較 日本教育心理学会第23回総会発表論文集 196-197.
- 堀野緑 1987 達成動機の構成因子の分析 —達成動機の概念の再検討— 教育心理学研究, 35, 148-154.
- 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 北山忍 1997 文化心理学とは何か 柏木恵子編. 「文化心理学 理論と実践」東京大学出版会
- 久保田まり 1995 アタッチメントの研究 内的ワーキングモデルの形成と発達 川島書房
- 岡本祐子 1996 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47, 849-860.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書房
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 —現代青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究, 32, 100-109.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度 —成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30, 64-68.  
(主任指導教官 湯澤正通)